

グレアム・グリーン『キホーテ神父』

——ワインと車が担う物語の中での役割——

山村 結花

日本大学大学院総合社会情報研究科

Graham Greene: *Monsignor Quixote*

—Roles of Wine and Cars in the Story—

YAMAMURA Yuka

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Monsignor Quixote (1982) is the twenty-second novel written by Graham Greene at the age of seventy eight. It is the travel story of the two men; the one is called Monsignor Quixote who is supposed to be the descendant of Don Quixote, well known as the main character of the story written by Miguel de Cervantes Saavedra, and the other is called Sancho who is the previous Mayor.

When it comes to the one of the feature of the story, drinking by the characters and their own cars are seen frequently through the story. However, there has been not any research about the roles of the wine as well as the cars they own.

Therefore, in this paper, I tried to clarify some of the peculiar charms in Greene's literature by analyzing the roles of both the wine which Father Quixote offers to the bishop who comes from Italy and two types of cars in *Monsignor Quixote*.

1. はじめに

カトリック作家と称されるグレアム・グリーン (Graham Greene, 1904-1991) の作品は、プロット、登場人物、物語の舞台設定、技法等において、特異な文学的特質を持っている。彼は、65年の作家人生において、小説、戯曲、旅行記、自伝、映画評論など合わせて60編以上にものぼる作品を残した。これらのなかでも、本稿で取り上げる『キホーテ神父』

(*Monsignor Quixote*, 1982) は、当時七十八歳であったグリーンの二十二作目の長編小説であり、イギリスのボドリー・ヘッド社とアメリカのサイモン・アンド・シュスターズ社から同時出版された。¹

この物語の舞台はスペインであり、その時代設定はフランコ総統 (Franco Bahamonde, 1892-1975)² 没後から1980年代初頭までと推定される。スペインの作家セルバンテスで知られるドン・キホーテの末裔にあたとされたキホーテ神父と、コミュニストであるエル・トボソ (El Toboso) の元町長サンチョ

の旅を描いたこの物語には、この二人の主人公の飲酒行為が頻繁に描かれていると共に、数種の車が登場人物の愛車として用いられている。そこで、本稿では、この物語の冒頭に用いられているワインと、二種の車に関する描写に着目し、それらが物語のなかでどのような役割を担っているかを検証することを目的とする。

2. プロット

この物語は二部構成である。第一部において、キホーテ神父は、ある日、イタリアのモトボ³からきたある司教を助けたことがきっかけで、最高聖職者の尊称モンシニョール (Monsignor) に昇格したことをローマの教皇庁から手紙によって知らされる。しかし、キホーテ神父に与えられた栄誉に不満を抱いた彼の管区の司教は、キホーテ神父に休暇を取らせる。キホーテ神父は、彼が唯一心を許すエル・トボソの元町長と、ロシナンテと呼ぶ中古の小型車にワイン

を積み込み、マドリッドまでの小旅行に出発する。元町長の名は、サンチョ・パンサと同じ名字を持つエンリケ・パンサ。それゆえ、彼はサンチョと呼ばれている。この旅行中、二人は数々の出来事に遭遇するのであるが、彼らは幾度となく共にワインを飲みながら対話をし、互いに打ち解けていく。

第二部は、キホーテ神父と管区の司教との対立から始まり、小旅行が二回繰り返された後、キホーテ神父は、ガリーシアで献金を募る悪徳神父の存在を知り、激怒する。彼は戦場に出向くことを決心したかのように、今までの彼には想像できなかったような行動に出る。しかし、この彼の行動を暴動とみた警察は、キホーテ神父とサンチョが乗る車に発砲し、キホーテ神父は負傷する。重症となったキホーテ神父は譫妄状態になり、修道院内に匿われる。彼は意識が朦朧とうする中、自ら立ちあがり、ワインもパンもない状況でミサを行う身振りをする。その様子をじっと見つめていたサンチョに、キホーテ神父は目に見えないパンを与えた後、静かに息を引き取るのである。⁴

3. 原書と日本語翻訳との照合から分かる小道具の役割

3.1. マルサラ・ワインとマラガ・ワイン

物語冒頭、キホーテ神父はワインの店で出会った司教を自宅に招待し、彼にワインを差し出す。この場面は、原書において次のように記されている。

Father Quixote returned to the bishop in a troubled state of mind, carrying with him a half bottle of marsala. (p.7)

しかし、日本語翻訳では、次のように記されている。

キホーテ神父はマラガ・ワインの半分ほどはあったボトルを手に、当惑した気持ちで司教のところへ戻った。(p.19)

原書では、キホーテ神父が司教にもてなすワインは‘a half bottle of marsala’「半ボトルのマルサラ・ワイン」であり、日本語翻訳が記すようにマラガ・ワ

インではない。マラガは、スペイン南部、アンダルシア州南部、県都マラガ、農業が主産業でブドウの産地としても知られている。⁵ つまり、マラガ・ワインとはマラガで作られている有名なワインなのである。一方、原書にある‘marsala’「マルサラ」は、イタリア南西部、シチリア島西端リベリア（ボエオ）岬にある港湾都市である。⁶ つまり、「マルサラ・ワイン」とは、イタリア・シチリア産のワインなのである。

では、異なるこれら二種の共通点は何であるのか。マラガ・ワインと、マルサラ・ラワインは共にフォーティファイドワイン（Fortified Wine）という分類に属し、それらは、ワインの酒造工程中に、ブランデーやアルコールを添加した酒精強化ワインなのである。⁷ もしかすると、翻訳者は、この物語の舞台がスペインであることを理由として、あえて、「マラガ・ワイン」と訳したのかもしれない。その真否は置くとして、筆者は、グリーンがこの場面において、あえて‘marsala’「マルサラ」を選んでいると考える。そして、その理由は三つある。まず、第一に、神父がワインをもてなす相手はイタリア人のモトボの司教である。キホーテ神父は、シチリア産の「マルサラ・ワイン」の味や品質を既知し、この司教をもてなすために、二人が出会った協同組合の場で、あらかじめ購入したのかもしれない。また、あるいは、その時、キホーテ神父宅に買い置きされていたワインの中に、偶然にも「マルサラ・ワイン」があったのかもしれない。その真相は物語の中では明記されていないのであるが、キホーテ神父は、司教がイタリア人であり、異国から来ているということを考慮して、この「マルサラ・ワイン」を司教に振舞ったと考えることができる。また、「マルサラ・ワイン」を介して、この司教とキホーテ神父との出会いが、故意に仕組まれたものなのか、それとも偶然に起こったものなのかという疑問をも、間接的ではあるが、感じ取ることができるのである。

第二に、彼らは共にローマ・カトリックの聖職者である。すなわち、イタリア産の「マルサラ・ワイン」は二人が共通して信仰するローマ・カトリックを象徴していると考えられる。そして、第三の理由として、キホーテ神父が次のように司教に述べているこ

とに注目したい。

"It is a very common wine, Monsignor, but here we are very proud of what we call the Manchegan."
(p.8)

キホーテ神父は、自分たちが今飲んでいるワインを ‘a very common wine’ 「ごく普通のワイン」と位置付けし、そして、今自分たちが飲んでいるこのワインとは異なり、「マンチェガン」という、キホーテ神父が住むマンチャという土地の地酒があるということ告げたうえで、その地酒をこの土地の者たちは誇りにしていると述べているのである。神父が「マルサラ・ワイン」を司教にもてなしながら、あえて自分の住む土地のマンチャの地酒について語ることで、神父が抱く自国の誇りと自国への愛を際立たせると共に、神父自身とイタリア人司教との相違、さらに、同じ信仰者であるが、互いの行く末の違いを暗示しているようにも受けとれるのである。

しかしながら、この引用箇所日本語翻訳は次のように記されている。

「地酒ですけど、モンシニョール、ワインの味はいかがです？土地の連中は、マンチャのワインと呼んで、自慢にしているのですが」 (p.20)

このように、日本語翻訳では、「マルサラ・ワイン」はどこにも現れないばかりか、それは「マラガ・ワイン」に替わり、マラガはアンダルシア州で作られているにもかかわらず、ラ・マンチャ州の地酒となっているのである。

その後、家政婦のテレサが地元の名産マンチャ・チーズを運んでくる。これは、馬肉のステーキを食べたことを司教に気付かせないために、味に保証のある名産のチーズを食べさせようとした、テレサと神父のユーモアあふれる策略とも考え得る。そして、彼らの策略通り、司教は美味しいワインとチーズを飲食しながら、自分に出されたステーキが馬肉であるとは全く気づくことなく、むしろ、司教はそれを美味だとさえ言うのである。

3.2. Seat 600 (セアト 600) と Fiat 600 (フィアット 600)

キホーテ神父は、自分の愛車を彼の名誉ある先祖ドン・キホーテの思い出から「ロシナンテ」と呼んでいる。神父のその車は、日本語翻訳では「フィアット 600⁸」とされているが、原書には ‘Seat 600⁹」と記されている。この相違を考えるにあたり、まず、キホーテ神父の車がどのように描写されているかに着目したい。

It was a day when the heat stood and quivered on the dry field, and there was no air-conditioning in his little Seat 600 which he had bought, already secondhand, eight years before. As he drove he thought sadly of the day when he would have to find a new car. A dog's years can be multiplied by seven to equal a man's, and by that calculation his car would still be in early middle age, (p.3)

これは、物語の冒頭の一節であるが、ここから、彼の車は、

- ①八年前に中古車で購入したもの
- ②冷房の備えがない
- ③犬の年齢で計算すると人間の中年にあたる

と理解できる。すなわち、古く、冷房のないこの車は、マンチャの地では運転に適していないと言える。しかし、神父はこの車に多大なる愛情を注いでいるのである。

さて、‘Seat 600’ 「セアト 600」は、スペインの車である。セアトのウェブサイトにはこの車が、1957年に製造開始された¹⁰ことが、また、フィアットのウェブサイトには、フィアットが1949年にセアト社の創始者メンバーとなった¹¹ことが記されている。さらに、emerging media Response のウェブサイトでは、2010年5月に、[セアト 60周年]と題する記事が連載されており、1950年に設立されたセアトは、出資比率が7%であったフィアットとライセンス契約を成功させ、フィアット 600のセアト版セアト 600が、フィアットとのライセンス契約に抵触しない範

囲で輸出も行なわれた¹²ことが記されている。そして、1982年には、フィアットがセアト株を売却し、1986年にフォルクスワーゲングループが51%のセアト株を取得した¹³ことも明記されている。こうした資料を参考とし、フィアット撤収以後、この型の車がフィアットから製造販売されていることを考えると、この小説が出版された1982年に、この車種を「フィアット 600」と翻訳した理由が理解できる。しかし、この小説で、グリーンは、「フィアット 600」ではなく、「Seat 600」と記したことには、特別な理由があると考えられる。なぜなら、この小説が世に出る二年前に出版された『ジュネーヴのドクターフィッシャーあるいは爆弾パーティー』(*Dr Fischer of Geneva or The Bomb Party*, 1980)¹⁴には、主人公アルフレッドの所有する車が「Fiat 500」と記されており¹⁵、これら二つの異なった車を、グリーンは、それぞれの物語において使い分けしていると考えられるからである。

では、この「Seat 600」「セアト600」には何が表徴されているのだろうか。第一に、この物語の舞台であるスペインを表わしていると考えられる。同じデザインのイタリアを代表するフィアットという車種を出すよりも、あえてスペイン車種を記すことで、読者は、物語の舞台を想定し易い。また、ラ・マンチャが舞台となる神父の先祖ドン・キホーテの物語から、神父は自分の愛車を「ロシナンテ」と呼んでおり、「ロシナンテ」と「セアト600」は、「スペイン」という共通点で繋がるのである。

第二に、物語における当時のスペインの情勢とその年代を表わしていると考えられる。日本語翻訳のあとがきには、この物語の時代設定が1960年代であると記されている。¹⁶ しかし、物語におけるサンチョのセリフには、「I have not stepped out of El Toboso since the death of that scoundrel Franco.’ (p.18)と記されているし、独裁者フランコは1975年で亡くなっている。つまり、この物語の時代設定は、物語のプロットにおいても先述したように、実際には1975年から1982年までの間ではないかと推測できる。また、戸門一衛はスペイン経済史の研究において、1950年代末に開放経済体制に移行してから積極的な外資導入を行った結果、スペインには大量の外国資本が進

出したことを、さらには、1960年代のスペインは経済成長期であり、スペインの場合、経済危機を脱却するのに、約10年かかったことを指摘している。¹⁷ それは、先述したフィアットのセアトへの出資とその後の撤収によっても理解できることであろう。また、物語冒頭において、神父が、八年前にすでに中古車であった「Seat 600」を購入したことが、明らかにされている。ならば、フランコ没後、すなわち、1975年以後、本作品出版年度1982年までという物語の時代設定が、「1957年以後からスペインのセアトで製造された「Seat 600」が、すでに何年かたっている中古になり、その後さらに八年経った時期」と重なる年代であると言える。つまり、この「Seat 600」という車によって、物語の時代設定がさらに限定され明確になるのである。

そして、第三に、キホーテ神父自身を表わしているということである。彼はスペイン人である。また、彼が、日々、牛肉ではなく、馬肉ステーキしか食べていないことから、彼は贅沢で裕福な暮らしはしていないと言える。さらに、彼は、ローマ・カトリックの神父である。一方、「Seat 600」という彼の愛車は、先述したようにスペイン製であり、中流階級のエコノミーカーとして製造された。そして、そのデザインと機能はイタリアのフィアットのものである。つまり、「Seat 600」は、スペイン製であっても、その本質はイタリアのものなのである。とすると、神父のアイデンティティ、そして、ローマ・カトリックという彼の本質は「Seat 600」という車に表わされていると考えられるのである。

4. 物語におけるメルセデス・ベンツ

4.1. モトポの司教の愛車メルセデス・ベンツ

ある日、キホーテ神父はエル・トボソから八キロ離れた共同組合にワインを買いに出かけた。キホーテ神父は、彼がロシナンテと呼ぶ自分の愛車セアト600が、駐車場で危うく「a stationary black Mercedes’ (p.4)「止まっている黒のメルセデス・ベンツ」に衝突しそうになる。そして、神父は、協同組合に入ろうとするそのメルセデス・ベンツの所有者である男の白い襟を目にした瞬間、その男がローマ・カトリックの聖職者であることに気付く。こうして、キ

ホーテ神父はモトポの司教に出会うのであるが、神父がメルセデス・ベンツを見たときの様子は、以下のように記されている。

How on earth, he wondered, could one of his brother priests afford a Mercedes? But when he drew up he noticed a purple bib below the collar which denoted at least a monsignor if not a bishop. (p.4)

キホーテ神父は、自分と同じ身分の聖職者が、なぜメルセデス・ベンツを購入できるのかと不思議に思いながらも、その聖職者が身につけている紫色のビブを見た瞬間、彼が自分と同じ身分ではなく、モンシニョールという高位の聖職者であることに気付いた。そして、この司教に話しかけるキホーテ神父の様子は次のように記されている。

It was with trepidation then that Father Quixote introduced himself to the high clerical figure in the distinguished Mercedes. (p.5)

キホーテ神父は、この司教のメルセデス・ベンツを、‘distinguished’「有名な・優れた・高貴な」¹⁸という語を用いて、その車の性能の良さと高貴な印象を表わすだけでなく、その所有者であるモンシニョールに対し、おののきまでも感じている。つまり、司教の愛車メルセデス・ベンツは、その所有者であるモトポの司教の身分の高さを表わすだけでなく、‘A very courteous man.’ (p.6) と記されているように、‘courteous’「礼儀正しく、丁寧な」¹⁹司教の人柄をも感じさせる役割を果たしていると考えられる。また、キホーテ神父の愛車セアト 600 が、古くてスピードも遅く、機能が不安定であることを考慮すると、メルセデス・ベンツを所有する司教とキホーテ神父との相違を分かりやすくしているとも考えられるのである。

しかし、モトポの司教は、この高性能で高貴なメルセデス・ベンツが故障し、全く走らなくなってしまったとキホーテ神父に打ち明ける。キホーテ神父の愛車ロシナンテが、古くてスピードが遅くとも、そ

の老体に鞭を打つかの如く、懸命に任務を果たしているという印象を与えているのに対し、この司教のメルセデス・ベンツという高級車が突然走らなくなるといえるのは、いささか不可解といった印象を与える。しかしながら、この疑問は、キホーテ神父の家政婦テレサによって、あっけなく解き明かされることとなる。それは、キホーテ神父がモトポの司教を自宅へ招いた際、キッチンにいるテレサが、キホーテ神父に次のように告げる場面にみられる。

"In my opinion, it is all his own fault. When I was a young girl I lived in Africa. Negroes and bishops always forget to refill with petrol." (p.10)

このテレサの言葉通り、キホーテ神父が司教のメルセデス・ベンツのガソリン・タンクを調べてみると、ガソリンは底をつき、タンクは空になっていたのである。そして、この状況をキホーテ神父自身も信じることができない。

He didn't believe the problem was as simple as all that, but there was no harm in trying, and sure enough the tank was empty. (pp.10-11)

しかし、キホーテ神父は、司教の車がガソリン切れと分かっているが、司教自身がうかつであることを知られたくはなかったのではないかと推測する。

その後、司教のもとへキホーテ神父が戻ると、司教は神父を待つ間、セルバンテスの小説を読んでいたり話し、セルバンテスがモラリストであったことを示す箇所を見つけたと述べ、以下のように小説の一節を読み上げる。

‘It is a duty of loyal vassals to tell their lords the truth in its proper shape and essence without enlarging on it out of flattery or softening it for any idle reason. I would have you know, Sancho, that if the naked truth were to come to the ears of princes, unclothed in flattery, this would be a different age.’ (p.11)

これは、『ドン・キホーテ』の後篇第二章における一節であることが日本語翻訳書に記されているのであるが²⁰、その後すぐに、司教は自分のメルセデスの状態をキホーテ神父に訊ね、キホーテ神父は司教に次のように答える。

"The garagist has not yet returned, so I took a look at the engine myself." He held out his hands. "A messy job. You were very low in petrol—that was easy to remedy, I always have a spare jerrican—but what was the real fault?" (p.11)

このように神父は、かなり面倒な仕事であったこと、そしてガソリンが底をつきかけていたが、この補給は簡単に終わったこと、そして、本当の故障の理由は分からなかったことを司教に告げるのである。この神父の司教に対する返答は、事実ではない。しかし、キホーテ神父が告げたこの事実でない事柄は、司教が読み上げた『ドン・キホーテ』の一節にあるように‘idle reason’によって引き起こされた言動ではない。‘idle’は「1.怠けた、2.仕事をしていない、3.使用されていない、4.価値のない、根拠のない」²¹といった意味である。つまり、「くだらない理由」による行動ではないということである。なぜなら、このキホーテ神父の言動は、うかつな失敗をした司教に恥をかかせたくないとする、キホーテ神父の優しさや思いやりのある配慮によるものであると理解することができるからである。しかし、キホーテ神父のこの返答に、司教は次のように答える。

"Ah, it wasn't only the petrol," the bishop said with satisfaction. (p.11)

この司教の返答は、二通りの解釈ができる。ひとつは、司教の言葉通り、彼は本当にガソリン切れと知らなかったのかもしれないという解釈である。そして、もうひとつは、司教が本当はガソリン切れという事実を知っていたのではないか、あるいは、ガソリン切れという状況を自ら故意に作りだしたのではないかという解釈である。もし、前者の解釈であれば、司教とキホーテ神父との出会いは偶然であると

言える。しかし、後者の解釈であれば、司教とキホーテ神父との出会いは故意に仕組まれたものであり、司教がキホーテ神父に出会うきっかけを作り、キホーテ神父の人格や人柄を見定めようとしたのかもしれない。つまり、キホーテ神父がモンシニョールに昇格されたのは、偶然ではなく仕組まれたものだったのかもしれないということである。そして、これは、先述した物語における「マルサラ・ワイン」の用いられ方にも垣間見られたことである。

さらに、このメルセデス・ベンツによって、キホーテ神父と司教との身分の差はもとより、テレサの助言に耳を傾け、司教に恥辱を与えることがないようにと配慮するキホーテ神父の他者に対する愛や、優しさにあふれた人柄をも間接的に表わしているとも言えるのである。

また、司教のメルセデス・ベンツの描写と共に用いられた『ドン・キホーテ』の一説は、物語の結末におけるサンチョの神父に対する行動にも関係していると考えることができる。それは、物語結末、キホーテ神父の愛車ロシナンテが廃車同然の状態になり、片や、キホーテ神父は意識が朦朧となる場面にみられる。なんとかロシナンテの状態を問いただそうとするキホーテ神父に対し、サンチョはロシナンテの実情をキホーテ神父に知らせようとはしない。

"Very tired. She's resting in the garage."

"What an old pair we are. I am tired too." (p.186)

このサンチョの言葉には、サンチョが、朦朧としたキホーテ神父の様態を考慮し、キホーテ神父にとって、ロシナンテの現状を受け入れるにはショックが大きすぎると判断すると共に、キホーテ神父に安堵感を与え、ゆっくり休ませてあげたいと願っている様子がうかがえる。

一方、キホーテ神父は、このサンチョの言葉に自分とロシナンテが共に疲れ、自分たちが一心同体であることを強調するような返答をしている。こうしてみると、神父とロシナンテの関係は、モトポの司教と彼のメルセデス・ベンツとの関係とは対照的であると言えるのではないか。もし、モトポの司教がガソリン切れを知らなかったのであれば、司教は自分

の愛車であるメルセデス・ベンツの状態を把握できておらず、メルセデス・ベンツの方はというと、司教のうかつさが原因となって、走り出したい司教に反し、動き出すことができなかった。片や、キホーテ神父はロシナンテの走り具合に常に敏感であり、神父とロシナンテの疲労度は常に比例していると言える。ここには、キホーテ神父が自認する通り、彼とロシナンテが‘a old pair’「古き同伴者」であるということを十分理解できるのである。

このように考えると、この物語におけるメルセデス・ベンツは、セアト 600 と共に登場人物の地位や人柄を表わすものとしての役割だけではなく、物語の中で幾度とみられ、この物語のテーマのひとつでもある「事実と虚構」といった問題を、間接的ではあるが、示しているとも考えられるのではないか。物語終盤、負傷し、サンチョによって運びこまれたキホーテ神父を受け入れるトラピスト会修道士のレオポルド神父が、その日の来客者であるアメリカ合衆国ノートルダム大学のヒスパニア学教授ピルビーム (Pilbeam) に次のように述べていることに着目したい。

"I suppose Descartes brought me to the point where he brought himself—to faith. Fact or fiction—in the end you can't distinguish between them—just you have to choose." (p.180)

つまり、「事実と虚構」は区別できるものではなく、私たち自身がどちらか選ばなければならぬもの」という観念について、物語冒頭に登場する事物のひとつである司教のベンツにおいても、読者は選択の機会を突きつけられているのである。

4.2. メキシコ人の愛車メルセデス・ベンツ

この物語の中で、メルセデス・ベンツという車種がもう一度登場する場面がある。それは、第二部第三章一において、キホーテ神父が彼の管区の司教の手配によりエル・トボソに連れ戻された後、再び元町長サンチョと旅に出発し、ガリーシアのワイン園に出向いた場面である。ワイン園にようやくたどり着いたキホーテ神父とサンチョは、すでにその場に

メルセデス・ベンツが駐車していることに気付く。

They parked Rocinante behind a Mercedes which had already usurped the best place. (p.162)

このメルセデス・ベンツの駐車を、ロシナンテの駐車のように‘park’「駐車する」²²という語を用いず、‘usurped’「1.<権力・地位>など暴力で（不法に）入手する、強奪する、2.領地・財産などを占有する、根拠なしに用いる」²³を用いている。しかも、駐車場所を‘the best place」と記すことで、このメルセデス・ベンツが「最高の場所」を奪い取っているかのように表現している。メルセデス・ベンツはドイツ車であることはよく知られたことであるが、この車種の駐車場所に「ドイツ占領下」というイメージを持たせているようにも読み手は受け取ることができる。また、ここで登場するメルセデス・ベンツの所有者は、先述したモトポの司教ではなく、物語の中で「メキシコ人」とよばれる実業家の男である。

As they began to climb the path a stout man who wore a smart suit and a startling striped tie came hurrying down it. He was muttering angry words to himself. (pp.162-163)

この所有者の男の体軀を表わす言葉である‘stout’は「1.太った、ずんぐりした、かっぷくのよい、2.頑固な、しっかりとした、ぐらつかない、3.勇敢な、大胆な、断固とした、4.（作り・構造などが）強い、頑丈な、丈夫な」²⁴という意味がある。このベンツの所有者の男を単に‘big’や‘fat」といった語を用いず、あえて‘stout’を用いているのは、この男の外見だけではなく、彼の内面も表わしていると考えられるし、さらには、彼の車メルセデス・ベンツの高級性や特徴・性能をも表わしているようにも解釈できる。また、ここで、同じ「がっちりした」といった意味を持つ‘solid’²⁵と言う語が用いられていないのは、この男が、‘solid’の別の意味である「堅実で信頼できる」といった人格に値しないことをも表わしているのではないか。現に、この男は、物語の終盤において、キホーテ神父が悪徳神父たちに対

して聖母マリアの冒涇だと発言した際、キホーテ神父がモンシニョールなどではなく、ワイン園にワインを買いに来ていた、ただの男であると言った。そして、

"Thief! Blasphemer! Impostor!" (p.174)

と大声で叫び、さらには、キホーテ神父が коммуニストであるとも付け加えた。

このように、この場面で用いられるメルセデス・ベンツは、この車の所有者であるメキシコ人の男の実業家という身分と体格や体型といった男の外見、さらには、間接的ではあるが、キホーテ神父を冒涇したこの男の内面をも想像させる要因となっている。つまり、この場面でのメルセデス・ベンツを用いた人物描写の役割が、地位や身分、さらに、人間性を表わしていることは先述したモトポの司教のそれと同じであるが、それらの内容は互いに異なるものである。

5. おわりに

本稿では、『キホーテ神父』の冒頭箇所におけるワインと二種の車に着目し、この物語におけるこれらの事物の役割を検証した。その結果、原書に記された‘marsala’「マルサラ」というワインには、神父の人柄や自国への愛、カトリック文学であるこの物語の主題、さらには、モンシニョールに昇格された神父が、聖職者としてモトポの司教と同じ運命をたどることのない物語の展開をも示唆していることが見えてきた。さらに、ワインは、キホーテ神父とイタリア人司教との出会いが偶然であったのか、あるいは、故意に仕組まれたものであったのかと間接的ではあるが疑問を投げかける役割をも担っている。また、このワインが保存性を高めた酒精強化ワインであることを考慮するなら、物語の舞台であるスペイン、ラ・マンチャ州の熱い気候や風土を推測できる役割も担っていることが明確になったと言えるであろう。こうした物語におけるワインを用いた表象は、グリーンのカトリック四作品である『ブライトン・ロック』(Brighton Rock, 1938)²⁶、『力と栄光』(The Power and the Glory, 1940)²⁷、『事件の核心』

(The Heart of the Matter, 1948)²⁸、『情事の終り』(The End of the Affair, 1951)²⁹における「酒」を用いた表象と類似していることが分かる。なぜなら、これら四つの物語では、ワインがキリスト教に関する言葉と共に用いられており、信仰を象徴するものとしての役割を担っているからである。また、ワイン入手の困難さから物語の情勢や灼熱の地の風土を表しているし、ある特別な種類の酒を登場人物が好むことから、その登場人物の人物像やその心情を推測することができるのである。

さらに、この物語におけるキホーテ神父の愛車ロシナテの車種‘Seat 600’「セアト 600」については、この物語の舞台であるスペインと当時の情勢を表すだけでなく、キホーテ神父自身をも表わしていると言える。また、これとは対照的な車として用いられているメルセデス・ベンツという車種の用いられ方は、①その所有者の地位や身分を表わす、②その所有者の外見と内面の双方を表わす、③その所有者との関係性を表わすことで登場人物の対比を表わす、④物語の展開や主題を示唆する役割があると言える。このようにみていくと、グリーンは、車に関する知識とそれらから受ける印象を、物語中で登場人物と関わりを持たせて用いていると解することができるのである。

本作品以外にも『ジュネーヴのドクターフィッシャーあるいは爆弾パーティー』(Dr Fischer of Geneva or The Bomb Party, 1980)において、フィアット 500 が用いられていることは既述したが、メルセデス・ベンツもまた、共に用いられている。この検証結果は、こうした他の作品に関する今後の研究においても、これまで注目されることのなかった物語の魅力を探り当てて役立つものであると考えられるのである。

<使用テキスト>

Greene, Graham. *Monsignor Quixote*, PENGUIN BOOKS, 2008.

グレーム・グリーン著、宇野利泰訳『キホーテ神父』、早川書房、1983 年。

¹ グレアム・グリーン著、宇野利泰訳『キホーテ神父』、早川書房、1983年、p.295 参照。

² スペインの軍人、政治家。1936年2月に成立した人民戦線政府によって左遷され、7月スペイン領モロッコで人民戦線政府打倒のクーデターを起し、スペイン内乱の口火を切った。同年10月反乱側の政府首班兼最高司令官となり、39年3月内乱の終結とともに独裁的権力を不動のもととした。（ブリタニア国際百科事典（電子辞典）、2008年。）

³ ‘Motopo’ 原書では、その意味を 司教自らが‘In partibus infidelium’ (p.5) と述べている。それを日本語翻訳では「異教徒の国々」(p.16) と記し、さらに、「非キリスト者の国」(モトポの司教とは管区の定まらぬときの名義上の肩書き) (p.37) という補足が明記されている。

⁴ 山形和美編集・監修『グレアム・グリーン文学辞典』、彩流社、2004年、pp.162-164、[あらすじ] 参照。

⁵ 「マラガ」(ブリタニア国際百科事典（電子辞典）、2008年。)

⁶ 「マルサラ」シチリア州トラパニ県に属する。前6世紀にカルタゴ人によって建設され、シチリア支配の最重要拠点となった。前241年にローマ人に支配されてからは、カルタゴ遠征の基地。1860年G. ガリバルディが赤シャツ隊員1000人を率いてここに上陸し、南部イタリア攻略の基地とした。アラブ色の強い町で、イスラム教モスクも現存。（ブリタニア国際百科事典（電子辞典）、2008年。）

⁷ 加えられるブランデー等は、アルコール度数40度以上、ときには95度ということもある。これにより、全体のアルコール度数を16～22度程度まで高くして、コクや保存性を高めている。

「フォーティファイドワインを極める」
ASAHIWINE.COM, ASAHI BREWERIES, LTD..
22 October 2012.

<http://www.asahibeer.co.jp/enjoy/wine/know/wine/k_11.html>.

⁸ Fabbrica Italiana Automobili Torino (トリノにあるイタリア自動車製造会社) の頭文字から。

「フィアットの歴史」FIAT オフィシャルホームページ. Fiat Chrysler Japan. 22 October 2012.
<http://www.fiat-auto.co.jp/aboutfiat_history.html>.

1955年、ミニと並び称されるベーシックカーの傑作、600が誕生した。この車のために新たに設計された水冷直列4気筒OHV3ベアリング、633ccから24.5PSを発生するエンジンをリアに搭載、後輪を駆動する。

モノコックボディはダンテ・ジアコーザ自身がデザインを手掛けた可愛らしいスタイルで、イタリア工業デザイン上の一大傑作といわれる。最盛期にはイタリアの全乗用車の4割を占める大ヒット作となった。最高速度時速100キロ、大衆車。

「1955年フィアット600」GAZOO名車館. TOYOTA MOTOR CORPORATION. 22 October 2012.

<http://gazoo.com/meishakan/meisha/shousai.asp?R_ID=7052>.

⁹ 1957年、当時、スペインにおいて急増する中流層に向け、経済的な車として製造された。

“COMPANY: 60 YEARS OF SEAT HISTORY 1979-1950.” SEAT.com. SEAT. 22 October 2012.

<<http://www.seat.com/content/com/com/en/company/history/1979-1950.html>>.

¹⁰ “COMPANY: 60 YEARS OF SEAT HISTORY 1979-1950.” SEAT.com. SEAT. 3 May 2013.

<<http://www.seat.com/content/com/com/en/company/history/1979-1950.html>>.

¹¹ 「フィアットの歴史」FIAT オフィシャルホームページ. Fiat Chrysler Japan. 5 May 2013.

<http://www.fiat-auto.co.jp/aboutfiat_history.html>.

¹² 「[セアト60周年] 波乱万丈のストーリー」

emerging media Response. 株式会社イード. 5 May 2013.

<<http://response.jp/article/2010/05/19/140622.html>>.

¹³ 「[セアト60周年] VW傘下で躍進、しかし未来は」emerging media Response. 株式会社イード. 5 May 2013.

<<http://response.jp/article/2010/05/21/140726.html>>.

¹⁴ Greene, Graham. *Dr Fischer of Geneva or The Bomb Party*, VINTAGE BOOKS, 1999.

グレアム・グリーン著、宇野利泰訳『ジュネーヴのドクターフィッシャーあるいは爆弾パーティー』、早川書房、1981年。

¹⁵ 原書ではp.50に、翻訳書ではp.68に記されている。

¹⁶ グレアム・グリーン著、宇野利泰訳『キホーテ神父』、早川書房、1983年、p.295。

¹⁷ 神田外語大学外国学部教授 戸門一衛著「第5章 スペイン」財務総合政策研究所. 財務省. 15 April 2013.

<<http://www.mof.go.jp/pri/research/conference/zk051/zk051f.pdf>>.

¹⁸ ‘distinguished’、ジーニアス英和辞典第4版（電子辞典）、2007年。

¹⁹ ‘courteous’、ジーニアス英和辞典第4版（電子

辞典)、2007年。

²⁰ グレアム・グリーン著、宇野利泰訳『キホーテ神父』、早川書房、1983年、p.25。

²¹ ‘idle’、ジーニアス英和辞典第4版(電子辞典)、2007年。

²² ‘park’、ジーニアス英和辞典第4版(電子辞典)、2007年。

²³ ‘usurped’、ジーニアス英和辞典第4版(電子辞典)、2007年。

²⁴ ‘stout’、ジーニアス英和辞典第4版(電子辞典)、2007年。

²⁵ ‘solid’、ジーニアス英和辞典第4版(電子辞典)、2007年。

²⁶ Greene, Graham. *Brighton Rock*, PENGUIN BOOKS, 1977.

グレアム・グリーン著、丸谷オ一訳、グレアム・グリーン全集6『ブライトン・ロック』、早川書房発行、1992年。

²⁷ Greene, Graham. *The Power and the Glory*, PENGUIN BOOKS, 2003.

グレアム・グリーン著、斎藤数衛訳『権力と栄光』、早川書房、2004年。

²⁸ Greene, Graham. *The Heart of the Matter*, PENGUIN BOOKS, 2003.

グレアム・グリーン著、小田島雄志訳『事件の核心』、早川書房発行、2005年。

²⁹ Greene, Graham. *The End of the Affair*, PENGUIN BOOK, 1999.

グレアム・グリーン著、田中西二郎訳『情事の終り』、新潮文庫、2009年。

(Received: May 31, 2013)

(Issued in internet Edition: July 1, 2013)